

共通第1次学力試験と第2次試験

入学者の選抜に関する調査研究において、共通第1次学力試験や第2次試験における得点の分布状況の把握や試験教科・科目間の得点の相関関係の把握等は最も基本的なものであり、ほとんどの大学や大学入試センターにおいて毎年行われている。非常に綿密な調査研究を積み重ねてきている大学も多い。

昭和54年度に共通第1次学力試験の導入など新しい入学試験制度が行われるようになってから、6回の入学試験が実施されてきている。このことをふまえて昭和54年度以降の変化を種々の角度から検討することが、いくつかの大学で行われた。このような調査研究においてまず検討されるのが受験者層の変化に関するものである。これをそれぞれの大学の受験者全体の共通第1次学力試験の得点の分布の変化の形でとらえているが、その年度の試験問題の難易差による影響もあり単純には比較できないため、各年度の全国の受験者の得点分布との比較においてとらえている。受験者の得点分布のちらばりが減少傾向にある大学もあれば、増加傾向にあることを示す大学もあり、またあまり変化の見出せないことを指摘する大学もある。次に、別の観点から受験者層の変化や各教科・科目の試験問題の性質等を把握する目的で、九州大学等においては共通第1次学力試験および第2次試験の教科・科目間の得点の相関（相関係数）の年度ごとの変化を調査検討している。大学により多少異なるが、共通第1次学力試験と第2次試

験の総得点どおし、英語の得点どおしの相関係数は比較的安定しているが、数学の得点どおしの相関係数はかなり変動がはげしいことを示す大学もある。大学により少し異なるが、総得点どおしや英語の得点どおしの相関係数は例年比較的高く、国語の得点どおしの相関係数は例年比較的低いことを示す大学が多い。

一方、昭和59年度入学試験の受験者のみを対象とした共通第1次学力試験と第2次試験の教科・科目間の得点の相関に関する調査は例年のように最も多く詳細に行われている。共通第1次学力試験の異なった教科の得点については、理科と社会の間に比較的高い相関があり、国語と数学の間の相関が比較的低いことを指摘する大学が多い。共通第1次学力試験と第2次試験の総得点どおしや同一の教科・科目間の相関係数を学部、課程、分野別の受験者について調べている大学が多い。総得点どおしは0.3から0.8あたりまで大学により異なった値を示しているが、比較的高い値が得られている大学が多い。その大学の受験者集団が多様であるかどうかと、第2次試験の内容の違い等によりこのような差が出るのであろう。両試験の同一の教科・科目間の得点の相関係数は学部、課程、分野等によりかなり変動することを示す大学がいくつかある。全体的には英語どおしの相関係数は比較的高く、国語どおしは低いようである。数学どおしは0.5前後の値を示す大学と低い値を示す大学がある。このような相関関係を利用して大

阪大学では共通第1次学力試験と第2次試験の教科の得点の特徴を見出すために因子分析を行っている。両試験が実際にはどのような形でかかわっているのかを分析する試みといえるであろう。

合格者を決定するのに共通第1次学力試験の得点と第2次試験の得点の配点をどの様にすればよいかという問題は重要であり、その研究も例年のように多くの大学により精力的に行われている。共通第1次学力試験の得点のみで選抜する方式、第2次試験の得点のみで選抜する方式、その中間として共通第1次学力試験の得点に対するウェイトを徐々に減少させていき、それにともない第2次試験の得点に対するウェイトを徐々に増加させて、いくつかの方式を考え、昭和59年度の各大学の受験者について実際に選抜を行ってみて、現行の方式での合格者がどの程度入れ替わるかという形で調査研究しているのが多い。各大学の現行の選抜方式がどのようなものであるかによって結果が多少異なるが、現行の選抜方式における配点を少々変化させても合格者の入れ替わりは10%以下におさまっている場合が多い様である。しかし現行の選抜方式の配点から離れるに従って合格者の入れ替わる率は増していくことが示されている。共通第1次学力試験の得点のみで選抜する方式や第2次試験の得点のみで選抜する方式を用いた場合については、現行の選抜方式における共通第1次学力試験の得点に対するウェイトがどのようなものであるかということにより入れ替わる率は異なるが、たとえば第2次試験の得点のみで選抜することになると30%程度の入れ替わりのある大学もある。合格者の選抜方式として

どれが良いかを論じるためには、方式の良し悪しを示す尺度が必要になる。この尺度として何を用いたらよいかということは大へん難しい問題であり、いくつかの大学で種々の試みがなされている。まず考えられるのが、その選抜方式による合格者の入学後の成績が良いものということである。しかしこの尺度も、入学後の成績として何を用いるかということや現行方式による不合格者については入学後の成績の資料がないこと等の困難がある。次に、その選抜方式による合格者の共通第1次学力試験の得点や第2次試験の得点の平均点の変動に注目して研究をすすめている大学もある。共通第1次学力試験の教科間のウェイトについても、同一大学で等しいウェイトで入学試験を行っている学科と、異なったウェイトで入学試験を行っている学科について数年の状況を調べ、後者については高いウェイトをおいた教科の成績の良い受験者が集まる傾向があることを見出している大学もある。

共通第1次学力試験の自己採点の実状についての調査も京都教育大学等で行われている。共通第1次学力試験の高得点者の自己採点は過小評価で、低得点者は過大評価の傾向にあるという前年度の調査で得られた結果が再確認できたという報告や自己採点と真の得点との相関係数等が求められている。

各大学の第2次試験についても、種々の調査分析が行われている。弘前大学等では、試験問題について高等学校教員の意見を求めその意見の分析を行ったり、第2次試験の教科・科目の得点をもとに因子分析を行い、得点間にどのような傾向があるかを分析したりしている。

帯広畜産大学等では、共通第1次学力試験や第2次試験の理科や社会の選択科目についての調査を行ったり、年度による変化も調べている。

大学入試センターにおいては、共通第1次学

力試験の各教科・科目の問題についての専門家による評定結果に基づき、目標と内容について詳細な分析を行い、客観検査によっても知識は勿論、教科学習のほとんどすべてについて大なり小なり測られていること等を示している。